

「笹川杯作文コンクール 2013」～日本語で応募～ 優秀賞作品

※日本語の原文を尊重し、一切手を加えておりません。

中日の未来のために私たちが出来ること

福建師範大学 陳立穎



三年前、私は「名探偵コナン」というアニメのおかげで、日本語を勉強する決心をした。この三年間、日本語を通じて、文化をはじめ、経済、社会などを含めて、日本という国をより詳しく知るようになった。日本語の勉強は私にとっても深い影響を与えてくれた。

初めての日本事情の授業の時、先生から中国と日本は一衣帯水の隣国であることを教わった。日本語の勉強とともに、中国と日本の間に深い絆があるとだんだんわかるようになってきた。

しかし、残念なことに、切ってもきれない絆を持っている中日の関係は順風満帆ではない。歴史や政治の問題で、中日関係は何度も堅氷期に入り、民間交流もその都度ピンチに陥ってしまった。

日本語科の学生たちはいわば中日交流の最前線の一員だと言えるかもしれない。それは、日本人先生と不断に交流しているからだ。

私は日本人の先生と知り合ってから、たくさんの思い出を積んできた。おいしい料理を一緒に食べたり、景色の美しい所を一緒に回ったり、さまざまな話題を話し合ったりして交流してきた。私は豊かな大学生活を過ごすことができた。

去年、魚釣島のことで中日関係は厳しくなった。最前線の私たちは「中日が以前のような友好関係を取り戻す日はいつ来るのだろうか」と悩まされた。我々にできることはいったい何か。この間に対して、日本人先生との交流から私はある答えに気づいた。

旅行好きな目黒先生はよくいろいろな所へいく。先生が故郷の漳州にいらっしゃったとき、漳州の夜市を案内した。

初めて出会った賑やかな市場に、先生は目を瞠った。カメラでいろいろ写真を撮りまくった。

その時、ある屋台のおばさんオーナーは「なぜ写真を撮ったの、うちの服がきれいだから？」と聞いた。

「外国人の方なので、物珍しくて面白いと思ったから」と私は返事した。

そのおばさんはまた「外国人に見えないなあ、どこの国の人？」と聞き返してきた。

その時、私は返事に躊躇った。中日関係のうまくいっていない今という時期に「日本人」だということとはとても言えなかった。でも、嘘をつきたくないの、「日本人」と返事した。

すると、「知っている、魚釣島のことで、我々中国人は日本人が大嫌い」とおばさんから嫌な言葉が返ってきた。

このおばさんの言葉について、私の悪い予感がやはり当たった。その言葉に腹が立ってしまった私は、怒りのあまり、つい「それは政治の問題。個人の付き合いには関係がないものだ」と大きな声で言った。

落ち着いて考えてみたら、おばさんの言葉、実は理解できないわけでもない。おばさんと私の考え方には違いがある。私は日本人のいいところをわかっているから、日本人に好意を持っている。しかし、直接日本人と接したことのないおばさんなら、歴史と世論に縛られがちだ。

日本を嫌わないイコール愛国心がないと思いつく世論は一時的に流行っていた。少し過激だと思う。こんな世論に流され、あまり深く考えずに一方的に日本人に悪い印象を持っている人は少なくない。

実は「私たちがしているのは民間の交流で、政治と関係ありません」という言葉はごく普通の中国の銀行員の口から漏れ出した。

私が銀行で実習していた頃のことだった。工作中、日本からの小包が届いた。中には浴衣が入っていた。その場にいた従業員たちは興味を抱き、写真も撮った。その時、誰かが領土問題の話を持ち出すと、その銀行員はぴしゃりと答えたのだ。

初めて普通の中国人からこの言葉を聞いたとき、私は少しびっくりした。でも、すごく感心した。

領土問題を生起させたのは政治家ではないか。政治家のやったことだけで、全ての日本人を否定するのは正しいか。民間交流に政治を持ち込むのはやはり良くないと思う。

私は、日本文化に興味を持ち、中日友好を望みながら日本語を勉強している一人の学生である。政治の世界とは距離を保ちたい。

全ての日本人が政治家ではない。多くの人は普通の人であり、私たちとはただ国籍が違うだけだ。領土問題で、全ての日本人を色眼鏡で見ることはやめたほうがいいのではないか。

我々のできることは、政治問題と民間交流を混同している人たちに「これは民間の交流です。政治の問題と関係がない。混同しないでほしい」とまず教えることだと思う。

確かに、一人の力は非常に限られているが、もし中日友好を望んでいる私たちが一緒に力を合わせたら、堅氷を少しでも溶かすことができると私は信じている。

みんなで心から中日友好を望むのならば、今の状況はきっと変わる。